小中学校教員と教育委員との意見交換会（意見概要）

1 日時・場所

平成 29 年 10 月 13 日（金） 15：00～16：30 千葉市議会棟全員協議会室

2 出席者

- ・小中学校教員 12 人
- ・教育委員 5 人

3 意見交換テーマ

日々の仕事の中で感じる教育に関する課題について

4 意見概要

教員から日々の仕事の中で課題だと感じていることについて発言の後、教育委員も交え自由な意見交換を行った。

■施設・環境について

- ・トイレの老朽化が進んでいる。
- ・パソコンが 1 人 1 台あると、順番待ちが解消され、残業も減ると思う。
- ・学力の低下の原因は施設面にもあると思う（理科室の設備が整っていないために実験ができないなど）。また、インターネット環境、大型テレビ、電子黒板などを整備することで、動画を使用するなど、多様な授業が出来るようになる。
- ・校内でメールを使いたい。今は大会の申し込みなどもメールで行うので、結果的に家に仕事を持ち帰ることになる。
- ・校務システムの容量が小さく、画像や動画の処理ができない
- ・施設関係の改修予定、順番等を示してほしい。

■多忙感について

- ・残業が多い。土日も出勤している。
- ・小さな子どもがいる教員は、保育園に迎えに行き、また学校に戻って仕事をしている。
- ・業務が多岐にわたるため、常に多忙感に悩まされている。精神的余裕が無く、十分に子どもと向き合うことが出来ない時がある。22時、23時までの残業が当たり前という現状に疑問を持つべきだと思う。
- ・行事が多いと感じる。教員の中でも、行事を縮小すべきだという人と残すべきだという人で意見が割れる。子どもたちにとって大事なものを残し、必要の無い部分を失くしていけたらいいと思う。
- ・学年費等お金の管理、徴収。保護者との関係が悪くなるきっかけにもなるので、教員以外がやるべきだと思う。
- ・校務システムとチェーンズで別々に管理しているデータの管理方法が改善されると、事務作業などが早く済むと思う。

■部活動について

- ・土日も部活動を行うので、休みがない。教員だけでなく、子どもたちにも休みが無いということも問題だと感じている。保護者や生徒の気持ちを考えると、出来る限りの指導をしてあげたいと思ってしまい、教員の判断で自主的にやめるということは難しい。全体で日曜を休みにするなど、ルールを作らないと何も変わらないと思う。
- ・土日の部活動に関しては、やらせすぎではないかという保護者もいる。
- ・部活動は中学校教員の仕事の一環であり、部活動がある前提でこの職業を選んでいる。そこに対して負担だと感じることで自体に疑問を感じる。
- ・部活の価値は、部活で指導したことが普段の学校生活に生きてくることだと思っているので、地域の方が指導するなど色々な例があるが、教員が指導することに意義があると思う。縮小するのではなく、お金の面など、先生方が頑張れる方法を模索してほしい。
- ・交通費が出ないのが当たり前だと思っていたが、高校では出ると聞いて驚いた。
- ・専門的指導が出来る人がいない。人手不足を感じる。

■授業等について

- ・学校内のベテランの先生方の授業を見に行くなど、学びたい気持ちはあるが、日常業務に追われ、満足に技術を吸収できていないと感じている。
- ・自分のスキルアップのためにクラスを自習にすることに、不安や罪悪感がある。特に若手職員は研修が多く、他の先生方より自習になる時間が増えるので、授業の進度に影響してしまう。
- ・中学校は空き時間があるが、空き時間には事務仕事や授業準備を行っていて、他の授業を見に行くなどの時間はない。
- ・小学校に専科の先生がいることで、担任には週何時間か空きができる。担任の不在時に、校長、教頭、教務が授業を行っている学校もあり、担任の負担感の軽減につながっている。
- ・自分のスキルアップのために使う時間を取りづらいと思ってしまうということに危機感を感じる。研究報告会などではなく、先生方が気兼ねなく普段の授業を見られるような機会を設けるべきではないか。
- ・新学習指導要領で新たに加わる道徳や英語について、研修を受けてはいるが、実際にはどのように授業を行っていけばいいのか具体化できていない。不安を感じている。
- ・稲毛小では二年前から全校一斉放送で国際理解教育を行っている。色々と試行錯誤しているところだが、先生方には英語を教えるのが苦手だという意識が強い。より実際の授業に役立つ形の研修ができればいいと思う。
- ・初めて理科専科教員となり、教材準備の大変さを痛感している。しかし、実際に授業を行ってみて、様々な教材を使用して体験することで、子ども達の理解が深まると実感しているので、必要なことだと思う。専科教員を置くことにより、学級担任も教材準備やほかの授業を見に行くなどの時間を取ることが出来る。
- ・クラスが減ると人員が削減されるが、仕事が一人分無くなるわけではないので、人手不足を感じている。今年度は生徒数減により、音楽専科の先生が来る日数が減った。専門性の無い先生が指導することになり、研修会の受講なども追いつかないのが現状である。

■日本語がわからない子どもへの対応について

- ・ 本人も、保護者も日本語がわからないという家庭が増えている。
- ・ ふりがなを振るなど出来る範囲で対応してはいるが、テストが理解できず0点の子もいる。そういった子供のために授業の裏で日本語指導が出来ればと感じているが、職員が足りず、現状では難しい。
- ・ 日本語指導教員が来るのは週1回。少ないと感じる。

■特別支援教育等について

- ・ 特別支援学級が増える一方、経験の浅い先生が多いため、指導内容の質に差があると感じている。授業についてアドバイスしてくれる人や、相談できる人が学校内にいないことで悩んでいる人も多い。学校の垣根を越えて、特別支援学級の担任同士で連携をとっていききたいと思う。
- ・ 経験年数の浅い教員が特別支援学級の担任になると、クラスが落ち着かなくなる場合もある。本人に専門性がなく、希望もしていないのに、突然特別支援学級担任になるというのは難しいのではないかと。実際千葉県では、特別支援枠で採用した人が特別支援学校で経験を積み、特別支援学級担任になることが多いと聞く。千葉市独自のやり方のままでいいのか、考えてみるべきなのではないか。
- ・ 学級担任と、特別支援教育コーディネーターを兼任している。今後重要になってくる役職だと思うが、兼任は難しいと感じている。他市他県に聞くと、コーディネーターを別で置いているところも多い。
- ・ LD等通級指導教室を担当してみて、ADHD等の子どもに担任だけで対応するのは難しいと感じている。また、目立たない学習障害などは、担任が気付かず、見過ごされるケースが多く、不登校等の原因になることもある。
- ・ 通級指導教室に通う子どもの保護者は、保護者自身も悩みを抱えている場合が多い。家庭の安定が子どもの安定にもつながるので、学校は保護者へも支援が出来るようになっていくべきだと思う。

■長欠生徒への対応について

- ・ 長欠生徒が各学年数名いるが、ほとんどの子どもが不登校になった理由が不明である。原因がわからないので、問題を根本的に解決してあげることができない。
- ・ カウンセラーとの接触、ライトポートへの引継なども検討するが、本人に外部と接触する意思がない場合、保護者も子どもの意思を尊重するので、手助けすることができない。
- ・ 家庭環境が複雑な生徒の場合、どこまで踏み込んでよいのか判断が難しい。

■SNSでのトラブルについて

- ・ ラインやツイッターといったSNSで悪口を書くなどの問題が日々起こっている。その都度指導は行っているが、学校生活上では見えてこない部分であり、発覚がすべて子どもからの発言なので、実態の把握が難しい。
- ・ 写真の掲載など、個人情報漏えいの心配もある。学校名等で検索し、発覚した場合は指導している。

■職員の配置について

- ・ 講師が学級担任になる例があるが、1年で異動するので、生徒や保護者との人間関係の構築が難しい。何度も担任が変わるような状況は、生徒にとっても慣れていくのが大変だと思う。講師自身も、採用試験の勉強がある場合がほとんどなので、学級担任をやらなくていいように改善してほしい。
- ・ 人員を増やすのは難しいが、配置については工夫ができるはず。講師から本採用になった際にそのまま同じ学校で雇用するなどの方法で対応できないか。

■保護者との関わり方について

- ・ 生徒に強めに指導を行うと、その話を聞いた保護者からのクレームが入る等、うまく関係性が作れていないと感じる。
- ・ 教育力、経済力の低い家庭が多く、保護者と生徒をセットでケアしていかなければならない。どこまで生徒と話し、どこまでを保護者と話し合うか、1年間の関係づくりを前提に、計画的に進めている。正解が無く、難しい課題ではあるが、非常に勉強になる。

■その他

- ・ 子どもたちにも若い先生にも自主性がない。
- ・ 経験年数の浅い教員が多く、活気がある一方、学校行事など経験者がいないことで苦勞している。
- ・ 割り算ができない、小学校レベルの漢字が書けない、など基礎的な学力が無いまま中学にあがってくる子どももいて、どう指導していいか悩んでいる。

■全体を通して委員より

- ・ 委員会で行っていることが、現場に伝わっていない。現場にロードマップを示すべき。先生方に安心感をもってもらえるように、委員会ももっと努力をしていかなければいけない。
- ・ 現場の意見を吸い上げる仕組みを考えるべき。限られた予算で何ができるか、現場からの知恵をもっと聞いて、活用していきたい。